

英文を正しく読む 実践編

名古屋語学教育研究室
服部 茂

< 英文 1 > は下線部を、< 英文 2 > はすべてを、語彙、文法、構文、英文構造に立脚して和訳せよ。
< 英文 1 >

Our conduct towards our fellow-men is determined by the principle of self-preservation. The individual acts towards his fellows in such and such a manner so as to obtain advantages which otherwise he could not get or to avoid evils which they might inflict upon him. He has no debt towards society; he acts in a certain way to receive benefits, society accepts his useful action and pays for it. Society rewards him for the good he does it and punishes him for the harm.

< 英文 2 >

It is easy to say that the writer should have an occupation that provides him with his bread and butter and write in such leisure as this occupation affords him. This course, indeed, was forced upon him very generally in the past, when the author, however distinguished and popular, could not earn enough money by writing to keep body and soul together.

英文を正確に読む力をつけるためには、英文構造を見抜く力を養成しなければならない。英文読解は、ある意味、知的な作業となるので、読む訓練は、不可欠である。ある一定の期間、精読をするのは、有効な練習になる。どんな英文もごまかさずに読む。こうして、いろいろな形態の英文と向き合うにつれて読む力が備わってくる。もちろ

ん、その英文の知識背景も伴わなければならない。これは、英語とは別に日ごろから新聞、ニュースなど興味、関心を深くしておくことである。

英文構造の練習の内訳は、語彙、文法、構文を確認しながら学習し、個々の単語のはたらきなどを確実にインプットして、ある一定の英文の配置を理解することである。文は読まれるために書かれるので、誰もがわかる決まった規則で書かれていなければならない。精読は、英文の配置の規則を習熟することがその目的である。英文は、一つのセンテンスに一つの主語、述語動詞を含み文が形成されている。さらに、最小単位で意味をなす文のかたまりがくる。そのかたまりが、その文中においてどんな役割をしているか、つまり独立しているか（文の要素）、または、ある語句にかかっているか（形容詞節・句、副詞節・句）を区別する。その際、大切な文法は関係詞である。関係詞は、代名詞、副詞、コンマあり、なしのそれぞれの用法は完全に理解しておきたい。そして、指示・人称代名詞にも注意したい。その代名詞が何を指すかは、随時確認して、英文の内容についていく。代名詞は、英語の特徴でもある。その用法は、英作文にでも応用したい。

このエッセイで、今回取り上げたいのは、共通関係である。読者の中には、英文を訳そうとして日本語がつかないという経験をした人もいることと思う。それは、英文構造が見抜けていないことに起因すると思われる。つまり、どの語句と語句が関係しているかがつかめていない場合がある。以下に、共通関係の用法をみってみる。

< 例文 1 >

Everyone must not and cannot ignore *the rule*.
(誰もが、その規則を無視をしてはいけないうし無視することもできない)

この場合は、must not と cannot が and で結び付けられており、共通要素は、*the rule* である。

< 例文 2 >

No man can live by and for *himself*.
(一人でまた独力で生きられる人はいない)

これは、by himself と for himself が and で結びつけられている。つまり、共通要素は、himself である。

< 例文 3 >

She has had a varied, and sometimes interesting, life.

(彼女は、さまざまな、ときにはおもしろい生活を送ってきた)

このパターンは、下線部の形容詞がいずれも and で結ばれ life を修飾している。その他には、S + V + that S + V . . . and that S + V . . . では、最初の that 節と二番の that 節が and で結ばれ S + V が共通要素になっているパターンもある。最初の that は、省略できるが原則二番目の that は、意味が曖昧になるので省略しないほうが無難である。英文を読んでいて等位接続語、つまり、and、or、but がでてきたら、前文とどうつながっているかを確認することが大切である。

今回、冒頭に挙げた英文は、サマーセットモーム (William Somerset Maugham; 1875 ~ 1965) のエッセイである。モームは、英国の小説家で劇作家である。英国ではその評価は分かれるとのことらしいが、日本においては、親しまれている作家である。以前には、大学入試の英文読解では常連だった。筆者も高校生のとき教科書で読んだ覚えがある。彼は、10歳のときに孤児となりその後、叔父に引き取られ、つらい少年時代を送る。青年になり医学を修めたが、作家の道へと進む。彼の人生経験からくるその独特の人生観、思想は深く人間を考えさせる。< 英文 1 > は、*A Writer's Notebook* (1949)、< 英文 2 > は、*Summing Up* (1938) からのエッセイである。小説としての代表作は、『人間の絆』(*Of human Bondage*: 1915)、『月と六ペンス』(*The Moon and Sixpence*: 1919) がある。

では、< 英文 1 > と < 英文 2 > の英文構造を明らかにしてみる。

< 英文 1 >

まずは、S + V をさがす。そうすると、The individual acts が S + V の関係になっている (acts

の s に注目)。次に towards his fellows (前置詞 + 名詞) でひとかたまり。ついで、in such and such a manner (前置詞 + 名詞) でひとかたまり。so as to obtain advantages which otherwise he could not get のかたまりで意味を取る。which 節は関係代名詞で advantages を修飾している。次の or to に注目する。これは、先ほどふれた共通関係で、so as to の to である。その to が、to avoid evils which they might inflict upon him とつながっているのである。この which 節も直前の evils を修飾する関係代名詞である。二つめの下線部のポイントは、the good he does it である。it は、society を指し、does は、do + O + O の 4 文型で、この場合は、「～に . . . (利益・損害) を与える」の意。he does it が the good を修飾している (関係代名詞 that の省略)。

< 英文 2 > を見てみよう。まず押さえるポイントは、it is ~ to do . . . の構文である。an occupation that provides him with his bread and butter の that は、occupation を修飾する関係代名詞。bread and butter は、「生計の手段」の意。そして、今度も and に注目。この and write は、the writer should とつながる。続く英文は、however distinguished and popular でひとかたまり (however + 形容詞 + S + V) で、「たとえ (今は) 有名で人気があったとしても」の意。したがって when the author は、when the author could not earn enough money by writing to keep body and soul together と続く。when は、in the past を具体的に説明する関係副詞のコンマありの用法 (継続用法)。keep body and soul together は、「なんとか生活していく」の意。by writing はひとかたまりでとらえて「書くことによって」の意。

以上、英文構造に注目して英文をみてきた。もちろんこうした分析的な読み方は、あくまでも、訓練の過程のことである。いずれ、どんな英文にも自信をもって、前から読めるようになれば卒業である。もうそのときは、主語がどうの動詞がどうのということは必要がない。こんどは、英文そのものの中身を鑑賞したり、情報を得たりすることに専念できる。本来の、英文読解ができる。英文を、自分のことばで要約できるようになればさらに良い。文脈を追いながら、辞書でその文脈に

0.合う英訳を見つけて辞書を使えば、辞書を使うコツがつかめるであろう。読者の皆さんも、至極の名作を一日数行でも辞書を引ながら読んでみるのはどうですか。また機会があれば、英語と日本語の違ったニュアンスが楽しめる文学作品も解説したいと思う。

<英文1>と<英文2>を設問に応じてこなれた訳ではなく、あえて訳の過程が分かるよう試訳する。(<英文1> は、下線部のみ)

<英文1>

個人は、別の方法では得ることができない利益を手に入れ、また加えられかもしれない悪を避けるためにあれこれの方法で自分の仲間に対して振舞う。(中略)

社会は、社会に与えた利益に対して人に報酬をあたえ、害に対して人を罰する。

<英文2>

作家は、生計の手段を与える職業をもちこの職業が与える自由時間に書くべきだと言うことは簡単だ。実際、この過程は、作家は、たとえ(今は)有名で人気があったとしても、書くことによってなんとか生活していくほどの十分なお金を稼ぐことができなかった過去において至極一般的に強いられていたのだ。

英語の辞書について (2) 英英辞典

法学部
北尾 泰幸

1. はじめに

前号の語研ニュース (No. 21) で英和辞典について取り上げたが、今回は英英辞典 (English-English Dictionary) について取り上げたいと思う。学生諸君は英英辞典を使ったことがあるだろうか。

名古屋校舎の法学部・経営学部・現代中国学部の学生諸君は、「英語が専門ではないので、英英辞典を使うことなど思いもよらなかった。」とか「英英辞典なんてまだまだ難しすぎますよ。」という意見を述べるかもしれないが、愛知大学の学生諸君は十分に英英辞典を使いこなせるだけの英語力があると思う。使い方によっては英英辞典は非常に役に立ち、英和辞典だけでは得ることができない知見を得ることができるので、ぜひ英和辞典とともに使っていただきたい。しかしながら、英英辞典では英語の単語・熟語の意味が英語で説明されているため、英語母語話者が使うような難しい英英辞典を使ってしまうと、まるで蟻地獄に入っただけ出ることができないような感覚、あるいは富士の樹海で迷ってしまったような感覚に陥ってしまう。つまり、ある単語の意味を調べたところ、その説明文の中に出てきた英単語に意味が分からないものがあるため、調べている単語の意味をきちんと把握することができず、そのページに付箋(ポストイット)でも貼って印を付けておいて、その分からなかった説明の中の英単語の意味を引いてみる。すると、その新たに引いた単語の説明の中にまた分からない単語が出てきたので、さらに付箋を貼って印を付けておき、その単語を引く…。こうやって単語を引く作業を繰り返していると、知らないうちに数時間経っていて、辞書は付箋で膨らみ、まるでカリフラワーのようになっているとともに、いったい元々何の単語を引いていたのか分からなくなってしまっているだろう(これはこれで「ことばの海」に溺れた感覚を味わうことができ、幸せといえば幸せかもしれないが)。

したがって、学生諸君は、英語母語話者が使うような英英辞典ではなく、英語を外国語として学ぶ人向けの英英辞典を使う必要がある。本稿ではこのような英英辞典を紹介しながら、英英辞典を使うことの利点を探っていきたいと思う。

2. 英英辞典の特色

英語を外国語として学ぶ学生諸君にお勧めしたい英英辞典は次の5冊である。

(1) a. Sinclair, J. et al. (2006) *Collins COBUILD*